博士学位請求論文概要書

精神医学から哲学へいたるヤスパースの思索全体と根本態度

岡田聡

序

本論の目的は、精神医学から出発し後に哲学へ転向したカール・ヤスパースの思索全体を連続的に解明することである。従来の研究では、彼の精神医学および哲学の研究は、それぞれの分野の研究者によってそれぞれ別々になされてきた。すなわち精神医学から哲学へいたるヤスパースの思索全体の連続的解明は、彼が精神医学者として不朽の業績を残したということを考えると、当然なされるべき研究であるにもかかわらず、これまで手つかずのまま残されてきたわけである。ヤスパースというひとりの人間がおこなった探究が分断されたままでよいわけがない。

しかしながら一見、ヤスパースの精神医学および哲学は、相互に無関係に見える。両者を連続するものは何か。本論の目的はそれを明らかにすることでもある。本論では、ヤスパースの思索全体を連続するものとして、彼の根本態度に注目したい。

ヤスパースは『哲学入門』で書いている。「私たちは、たしかにヒポクラテスよりはるかに進歩している。しかしプラトンより進歩しているとはまず言えないであろう。」ヤスパースがここで主張しているのは、我々は古代ギリシャから、「科学的な知識」の点では進歩しているが、「哲学すること」の点では進歩していない、ということである。というのは彼によれば、哲学とは、普遍的な「知識」の集積ではなく、内的な「態度」に基づいた個々人による営みだからである。従来の研究ではほとんど言及されてこなかったが、ヤスパースの精神医学においても、そうした彼の態度が不可欠な働きをなしている。そして、ヤスパースの精神医学および哲学は、同一の態度によって支えられている。

ヤスパースの精神医学および哲学は、どのような態度によって、どのように支えられているのか。本論では、それを明らかにするために、ヤスパースの精神医学批判および哲学期のキリスト教批判を取り上げたい。

第１部　実存と超越者の近さの中の遠さ

まず第 1 部では、哲学期のキリスト教批判を取り上げる準備として、ヤスパース哲学の核心である形而上学、つまりその超越者へのアプローチについて考察する。本部は、特に『哲学』第 3 巻『形而上学』に基づいた、内在的な研究になる。

第１章　形式的超越と暗号解読

まず第1章では、超越者へのアプローチである「超越すること」のうち「形式的超越」と「暗号解読」の2つについて考察し、この両者の帰結が相対的なものの相対性の顕在化であるということを明らかにする。つづく補論では、この帰結を、ヤスパース哲学の一テーマである「交わり」という観点から再考する。

第２章　挫折と超越

ついで第2章では、特に暗号解読の挫折について考察し、挫折が相対的なものの相対性の顕在化であるがゆえに、挫折においてこそ、逆説的に、相対的なものから絶対的なものへという超越が決定的な仕方でなされるということを明らかにする。

第３章　実存と超越者の相即性

最後に第3章では、ヤスパース形而上学において実存と超越者が相即的であるとされる論理について考察し、この相即性が両者の近さと遠さの矛盾のうちに、しかも常に遠さを意識させながら成立するものであるということを明らかにする。形式的超越と暗号解読においては、それらの挫折、すなわち相対的なものの相対性が顕わにされるところでこそ、逆説的に、相対的なものから絶対的なものへという超越が決定的な仕方でなされるとされるが、この超越の〈逆説性〉は、そうした実存と超越者の〈近さと遠さの弁証法的な相即性〉に基づいているのである。

第２部　ヤスパースとキリスト教の近さの中の遠さ

ついで第2部では、この実存と超越者の近さの中の遠さの意識から、ヤスパースがキリスト教、特にその啓示信仰を批判したということについて考察する。本部では、ヤスパースの啓示信仰批判の核が、神を客観的なものに固定化する「神の局在化」への批判にあるということを明らかにする。

第１章　ヤスパースと20世紀前半を生きたキリスト教神学者との同時代的共通性

1963 年、ピーパー社から、人文・社会・自然科学の各分野の第一線で活躍する論者たちによる論文集、『現代の希望』が出版された。その中に、ヤスパースが「希望の力」と題する論文を寄稿している。

「希望論文」は、一面では、現代イスラエルの問題点を指摘するものであり、それゆえ、政治論文と見なすことができるものである。しかし他面では、ヤスパースの形而上学が彼の他の著作では殆ど論じられていない「希望」という観点から語られたものとして、彼の形而上学の理解にとっても欠かせないものである。それにもかかわらず、内容の読み取り難さのゆえか、従来のヤスパース研究ではまったくと言ってよいほど注目されてこなかった。

本章ではヤスパースの希望論と、「第1次世界大戦以降キリスト教神学の基調となって来た」と言われる「終末論」を手がかりとしながら、ヤスパースと20世紀前半を生きたキリスト教神

学者たちとの同時代的共通性を明らかにする。

第２章　ヤスパースの聖書的転回とキリスト教

しばしば、ヤスパースに転回があったか否かが問われる。ヤスパースは、1935 年の『理性と実存』の中で初めて、「実存」と並び立てて、「理性」を術語として用いた。また、1950 年の『現代における理性と反理性』では、今や自らの哲学を、「実存の哲学」ではなく、「理性の哲学」と呼びたいと述べている。こうした事情から、ヤスパースに転回があったか否かが問われる場合、特に、実存から理性への転回が問題とされる。

しかし、本章はこの転回について論じるものではない。むしろ、ヤスパースの従来注目されてこなかった転回に光を当てる。それは、聖書をめぐる転回であり、換言すれば、聖書に対する否定的な、あるいは無関心な態度から、聖書に対する肯定的な、あるいはその中に積極的な意義を見出そうとする態度への転回である。本論は、これを、今仮に、「聖書的転回」と名付ける。

本章は、ヤスパースの自伝的言及と当時の時代背景を参照し、彼の聖書的転回の事実と内実を明らかにしながら、ヤスパースの聖書宗教論とプロテスタンティズム論という二つの観点から彼とキリスト教の関係を見る。このことによって、これまで対立的に捉えられてきた両者の関係の中に、ある種の同根性を見出す。第 1 章ではナチズム時代以前におけるヤスパースとキリスト教神学者との同時代的共通性を確認したのにつづいて、本章ではナチズム時代におけるヤスパースのキリスト教への接近を確認することになる。

第３章　ヤスパースと 3 人の神学者

本部ではまず第 1 章において、ヤスパースと 20 世紀前半を生きたキリスト教神学者との同時代的な共通性を明らかにした。ヤスパースは自らの哲学の生成と展開においてキリスト教から大きな影響を受けた。ついで第 2 章において、ヤスパースがナチズムの時代の体験を通じて、そうした影響を自覚する一方、独自のプロテスタンティズム論を打ち出しキリスト教を名指しで批判するようになったことを明らかにする。

ヤスパースはこのように自らの哲学とキリスト教が近いがゆえにかえってキリスト教を批判する。本章では、パウル・ティリッヒ（第１節）、ルドルフ・ブルトマン（第２節）、フリッツ・ブーリ（第３節）という 3 人のキリスト教神学者を取り上げ、ヤスパースとの近さを指摘しながら、かえってその中で顕在化する遠さを明らかにする。

第３部　ヤスパースの根本態度

第 1 部ではヤスパース形而上学における実存と超越者の相即性が両者の近さと遠さの矛盾のうちに、しかも常に遠さを意識させながら成立するものであることを明らかにし、第 2 部では、この実存と超越者の近さの中の遠さの意識と、自らの哲学の聖書的根源の自覚とからなされた、ヤスパースのキリスト教批判について考察する。ヤスパースのキリスト教批判は、特にその啓示

信仰、すなわち神を客観的なものに固定化する「神の局在化」に向けられている。

ヤスパースの精神医学批判は、心的な機能が脳の特定部位に還元されうるといういわゆる「心的局在論」に見られるような、精神医学がひとつの方法を絶対化することによって陥る全体知に向けられている。ヤスパースの精神医学批判と哲学期のキリスト教批判は「局在化批判」としてまとめることができる。

本部では、こうした批判が絶対化に反対し開かれてあろうとするヤスパースの根本態度からなされていることとともに、精神医学から哲学へいたるヤスパースの思索の展開においてその態度が自覚され「理性」として術語化されていったことを明らかにしてゆく。

第１章　精神医学期の根本態度

ヤスパースの精神医学は「全体認識」に対置される「方法論的認識論」であり、その態度は「人間の在り方とはそもそも何々であると独断する態度」に対置される「方法論的意識」である。フーバーは次のように述べている。「方法論的反省と［方法の］体系性はヤスパースの精神医学の業績の核心部分である。ヤスパースは、独断的態度に対して、常に認識の観点性と特殊性を自覚している方法論的反省を対置する。」つまりヤスパースは、認識がそのつどの観点に依存すること、それゆえそのつど特殊なものであることを反省する。そして、こうした「絶対化する態度に反対する」「方法論的根本態度」こそ、ヤスパースの精神医学期の根本態度なのである。ハンス・ゲオルグ・ガダマーの言うように、「精神病理学の全領域での多面的研究方向についての叙述は、ヤスパースがあらゆる独断的一面性を疑い嫌う人間であることを証明していた」のである。

第２章　精神医学から哲学へ

今日、精神医学の方法論的な混乱の中で、初めて精神医学の方法論を確立したヤスパースが注目されている。ただし本章は、ヤスパースの精神医学の方法論そのものではなく、その方法論を支える態度に注目する。ヤスパースはその態度を、『精神病理学総論』第 4 版（1942 年、以下『新版』）で初めて、「方法論的根本態度」として自覚した。彼は、哲学へ転じてから、自らの精神医学の主著に全面的な改訂を施したのである。とすれば、『新版』での「方法論的根本態度」の自覚には、ヤスパースの哲学が何らかのきっかけを与えたと考えることができる。本章は、『精神病理学総論』の全面的な改訂に対してヤスパースの哲学が与えたものを、特に、そこでの「方法論的根本態度」の自覚に注目して、明らかにする。

ヤスパースは、『精神病理学総論』第 1 版（1913 年、以下『旧版』）において精神医学の方法論を確立し、『哲学』（1931 年）において哲学の方法論を確立した。

続いて『理性と実存』（1935 年、以下『理性』）において、哲学的思惟のみならず、科学的思惟をも含む広義の思惟の方法論が主題化された。それは、その方法論を支える〈開かれてある〉という態度としての理性の自覚を伴わなければならなかった。なぜならば、そうした理性に支えられて初めて、私たちが一つの方法への束縛から解放され、思惟の方法論が可能になるからである。

「方法論的意識によって、私たちは次々と新たに把握すべき現実に対して準備できる。それに対して、人間の在り方とはそもそも何々であると独断する態度は、一つの知識の中に私たちを閉じこめ、すべての経験にヴェールをかける。こうして方法論的根本態度は絶対化する態度に反対する。」この、絶対化する態度に反対する方法論的根本態度は、『理性』において自覚された〈開かれてある〉という態度としての理性に他ならない。『新版』における方法論的根本態度の自覚は、『理性』における理性の自覚によって引き起こされたのである。

以上のように、『哲学』から『理性』への展開と、『旧版』から『新版』への展開との間には、いずれも前著で行われたことを支える態度が後著において自覚されたという点で、類比的な関係が見られる。そして、前者の展開によって後者の展開が引き起こされたというところに、『精神病理学総論』の全面的な改訂に対して、ヤスパースの哲学が与えたものを、見出すことができるのである。

結語

以上のように本論では、まず第 1 部において、ヤスパース哲学の核心である形而上学、つまりその超越者へのアプローチについて考察した。形式的超越と暗号解読の挫折において、相対的なものの相対性が顕在化する。それらの挫折、すなわち相対的なものの相対性が顕在化するところでこそ、逆説的に、相対的なものから絶対的なものへという超越が決定的な仕方でなされる。この超越の〈逆説性〉は、ヤスパースにおける実存と超越者の〈近さと遠さの弁証法的な相即性〉に基づいている。次いで第 2 部において、そうした相即性の意識から、ヤスパースがキリスト教、特にその啓示信仰を批判したということについて考察した。ヤスパースの啓示信仰批判の核は、神を客観的なものに固定化する「神の局在化」への批判にある。ヤスパースと 20 世紀前半を生きたキリスト教神学者との間には同時代的な共通性があり、彼はナチズム時代にキリスト教に接近したが、この近さや接近のゆえにかえって、〈実存と超越者の相即性は近さと遠さのうちに、しかもつねに遠さを意識させながら成立する〉という自らの実存的根本信念に基づいて、ヤスパースはキリスト教を名指しで批判するようになった。最後に第 3 部において、まず、ヤスパースの精神医学批判の核が、心的な機能が脳の特定部位に還元されうるといういわゆる「心的局在論」に見られるような、精神医学がひとつの方法を絶対化することによって陥る全体知への批判にあることを明らかにした。「局在化批判」としてまとめられるヤスパースの精神医学批判と哲学期のキリスト教批判は、絶対化に反対し開かれてあろうとするヤスパースの根本態度からなされている。そしてこの態度は、精神医学から哲学へというヤスパースの展開において自覚され、「理性」と術語化される。つまり精神医学から哲学へいたるヤスパースの思索全体には、彼の根本態度が連続しており、精神医学から哲学へいたるヤスパースの思索の展開において、その態度が自覚化され術語化されていったのである。

ヤスパースは次のように述べている。「哲学的思想の目的は、それゆえその意義は、対象についての知ではなく、むしろ事物に対する内的態度の変革である。」ここで表明されている事態は、

私たちの意識がひとつの方法や立場、観点への束縛から解放されるということである。「方法的に意識された知は、部分的な認識を独断的に絶対化することによる誘惑から守り、どの特定の理論からも理論一般の意味を意識することによって解放してくれる。」先述したように、ヤスパースの精神医学は、「個々の研究の道や観点、方法を明確化することによって、精神病理学の多面性を示す」。また、彼の哲学的論理学は、あらゆる方法の可能性と限界を明らかにすることによって、方法の多様性に対応する真理の多次元性を明らかにする。つまりヤスパースは、まさにこのことによって、私たちの意識をひとつの方法や立場、観点への束縛から解放しようとするのである。

また前段落で述べたことは、言い換えれば、「私たちの視野を広げること」と表現できるであろう。ここで「開かれた地平」というヤスパースの言葉が想起されるが、ヤスパースは、『総論』の目標は「方法とその限界の明確な認識とによって研究の眼を開くこと」であり、哲学的論理学の態度は「果てしない広がりを見出す思慮深さを獲得する…情熱を持つ哲学的態度」（VE.37）である、と述べている。「[方法の体系性は]思索する者の意識を最大限に拡大することができる。」つまりヤスパースは、あらゆる方法や立場、観点の可能性と限界を明らかにし、それらの体系性を描くことによって、私たちの視野を広げようとするのである。

ヤスパースが、私たちの意識をひとつの方法や立場、観点への束縛から解放し、視野を広げようとするのは、一言で表現すれば、「とらわれなく世界の現実を見ること」のためである。ガダマーの言うように「ヤスパースが繰り広げる思索は、すべての独断の殻を打ち破ろうとし、おだやかに打ち寄せる思索の波の中で開かれた地平の広さを獲得しようとする」のである。

「方法（Methode）」という語は、語源的には、「道に沿って（meta-hodos）」という古典ギリシア語に由来している。「方法」という語を「道に沿って」という語源と関連付けると、それをヤスパースがしばしば用いる「途上にあること（Auf-dem-Wege-sein）」と結び付けて考えることができるであろう。ヤスパースは、「方法論は認識の『諸々の道』を示す」と述べ、「方法論的意識とは私たちの道を意識することである」と書いている。方法や立場、観点を意識することとは、私たちの道を意識することであり、つまりは、私たちが途上にあることを意識することである。つまりヤスパースの根本態度の核は、私たちが途上にある意識に存するのである。